

### 3. 独立、そして苦難

#### 周りの人に押され、迷った末の独立

ミナトタオルという名前は、工場が立地する湊町に由来する。1983年のミナトタオル創業は、周りの人に押されて迷った末の独立であった。独立への経緯は以下である。

美鶴タオルというタオル工場があり、矢野亀タオルの下請をしていた。1970年に矢野亀タオルが（株）ヤノーに改称したずっとあとの話であるが、ある日、美鶴タオルが火災に見舞われた。吉田氏は、偶然にも工場が火災のときに車内で消防無線を聴いており、美鶴タオルが火事だと知った。瞬間的に「あっ、美鶴タオルは矢野亀の下請しよるところや」とおもい、急いで（株）ヤノーに電話を入れた。現場に直行すると、工場は全焼し、工場内にあった15台のシャトル織機も丸焼けになっていた。すべての織機の損傷が激しく、復興するにも何ヶ月かかるか、その見通しすら立たない状態だった。

美鶴タオルの火災事件は、（株）ヤノーにとって大きな打撃だった。1980年代に入って中国製タオルが流入しはじめ、タオル業界に少なからずの影響を及ぼしつつあった時代であるが、紋織タオルを得意とする今治タオルはなおも好景気の最中にあっただ。（株）ヤノーにとって下請のタオル工場の喪失は、納品の遅延を意味し、取引先との信頼関係に影響を与える。

そこで、当時、（株）ヤノーの代表を務めていた矢野博文氏は、技術者として信頼の置ける吉田氏に期待を込めて、ある打診をした。新美タオルの下請をしていた湊町の壺内タオルが、不況のために織機を置いたまま操業を停止していたので、矢野氏はそこに目を付け、吉田氏に壺内タオルの工場を引き継いで、（株）ヤノーの下請としてタオルの製造に協力してほしいと依頼してきたのだ。

吉田氏の回想から当時を再現すると、吉田氏と矢野氏、周囲の人たちとの間につきのようなやり取りがあった。

- 矢野氏 「壺内タオルが今操業を停止して機<sup>はた</sup>が遊んどろう。あそこ、お前行って動かしてくれんやろか？どうしても要るんやから。」
- 吉田氏 「（織機は古臭く、しばらく動いていなかったため）こんなもん嫌ぞ。こんなもんしえせんぞ。」
- 周囲の人 「できるんやから、やった方がよかろう。」
- 吉田氏 「いいや、しえへん。金もないのに。これ動かすようにするのになんぼかかるんぞ。やっぱり、せん。」
- 周囲の人 「一生、よそに勤めに行かんでも自分でやったらなんとかできるかもわからんのやから、やれやれ。」
- 矢野氏 「品物の売り買いじゃなしに、糸を支給されて、それを加工して製品に仕上げる賃加工で回してくれ。それやったら金が必要んかろう。」
- 吉田氏 「ほならまあ、みんな友だちもやれやれ言うもんやから、仕方ないから騙されたとおもって、ちょっとやってみようか。」

賃加工なら初期投資の必要がなく、織りの技術があればすぐにも着手できるため、みなの後押しもあって、壺内タオルのあとを引き継ぐかたちで吉田氏は独立を決めた。1983年のバブル経済前夜のことであり、吉田氏が40歳のときである。タオル工場の名前は、所在地の湊町からミナトタオルと名付けられた。

操業開始から6、7年ほどは仕事に恵まれ、下請のタオル工場として多くの受注で毎日忙しい日々を過ごした。しかし、バブル経済が崩壊し、さらに中国製の安い紋織タオルの模造品が出回るようになり、少しずつ生産量が落ちていった。（株）ヤノーをはじめ受注先の親会社が問屋からの受注激減によって困苦ししている状態で、下請に仕事が入ってくるわけがない。賃加工の悲しい性ではあるが、厳しい状況に直面した吉田氏は、タオル工場を廃業するか、このまま

つづけるか、何度も自問自答を繰り返し、答えを出せないまま長く苦しい日々を過ごした。



ミナトタオルの工場内には12台の村秀鉄工所製のシャトル織機が設置してある。



工場のロフトにはシャトル織機の部品が保管してある。



ジャカード織機用の経糸を巻く前のビーム。

結局は、「借金も残ってるんやからもうちょっとやって、どこでもええから他のタオルメーカーに少しでもタオルを売って何とかするわ。ゴソゴソするわ」と踏んばったが、やればやるほど奈落に落ちていった。好況のときは親会社から注文が入って、それを賃加工すれば食べていけたが、そうはいかなくなった。自らが営業、そして経営し、利益を出していかなければならない。しかし、吉田氏には

そうした経験が一度もなく、原料の調達から販売までやってみたが、どうしても利益が出ない。どこかにロスが出てしまう。「どん底までいったよ。本当になんでやろうか、生まれが悪いんやろか、なんでこんなもん始めたんやろか」と深刻に悩むばかりであった。仕舞いにはミナトタオルと取引のあったタオルメーカーがいくつも倒産し、弱り目に祟り目だった。

事業を辞めるにも借金があるし、60歳を目前にして再就職は難しいし、神頼みしても先は見通せないし、自分でなんとか難局を乗り越えるしかなかった。バブル経済崩壊から10年を経た世紀の変わり目には今治でも革新織機時代にすでに突入していたが、吉田氏が長年培った技術はシャトル織機でのタオル製織だったため、新しい機械は導入せず、あくまで旧式にこだわり、タオルをつくりつづけた。



つねに糸の状態をチェックする吉田氏。

その結果、ここ7年ほど前から回復の兆しが見えてきた。長く辛い日々にようやく終止符が打たれた。回復の要因は、2006年から

スタートした今治タオルの産地ブランド化の成果が現れ、今治タオル全体の売上が上昇に転じたこと、そして、高品質が売りの今治タオルのなかでも古いシャトル織機を利用した風合いの柔らかいタオルの価値が改めて認められるようになったこと、である。

（次号につづく）

